おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和8(2026)年
5月号
通巻669号
毎月23日発行
(題字　矢追日聖)

★発行日　令和8年5月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷　大倭印刷株式会社
★定価　1部　300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

奈良と大阪にまたがる葛城高原のつつじ　(横田哲矢さん撮影)

座談会・法主を囲んで(再編集版)

禊(みそぎ)を通して生き方を考え直す(第2回)

法主　矢追日聖(満64歳)他

禊への疑問

矢追房子　私は禊会に、ミソガレようとかミソグとかの思いで行くわけやないけど、霊界からの通信が楽しみで、分からんけれども一応それを信じてるつもりで、霊界というのはそういうもんやろかなあと思ってね。

人間界から霊界に行ったときの事を想像してね、こういう心のもち方せなあかんとかね、そんな考えでいつも聞いてます。まあ普段人間界で聞かれんような事が聞けるので、それが楽しみで行っています。

杉本順一　一通り自分にとって禊とは何か、どう思うかを聞いてきました。僕自身について言えば、気が向いたら行く、向かなんだら他の事しているという感じで、余りこだわってはいません。

禊について僕が思うのは、人間の観念という問題です。お互いの言葉のやりとりだけの研鑽(※山岸巳代蔵氏が提唱した徹底した話合いによる真理追及の実践的な方法)でね、自分自身の血肉に沁み込んだような善悪観というか固定観念を取り払うことができるのかどうかという疑問が一つあります。それと振魂(ふるたま)の行(※『加美のまにまに』によれば「鎮魂(ちんこん)振霊」として「肉体を動かしながら〈動〉、現在意識をしずめ精神統一し、その極〈静〉に至った時内側より起こって来る不思議な霊的感応をいう。これは日本古来よりのもっとも重要な禊の行法の一つ

である」とある）によってもっと奥のとこからね、ツミというか固定観念を本当に揺り動かしてくれるのかどうか。

まあ一番早く言えば観念という言葉、善悪でもよろしいやん。自分のその善悪という観念を取り除くいう場合に禊で取り除くとか理屈では言えますやろ。この善と悪っていうものの考え方そのものが糊かなんかで引っ張りつけたもんであるなら取れるという感じですけど。その観念自体をお互いの言葉同士で取り払うことができるのかどうかっていうことがあるわけです。

例えば人を殺すことは絶対悪であるという決めつけがあるとしますね。そういうものは本当はなくて神さんは生まれてるものはみんな殺すんやから、それは絶対悪いとは言えんという理屈がありますね。そういう理屈を聞いたら、ああそうかと思うけども、そんなら自分自身の善悪観やその言葉によって固定観念が本当に砥石みたいに取っていけるものかどうかが疑問なんですわ。

僕がね、出来ないいうて決めつけられることも出来ない。だから言葉だけの研鑽で、自分自身の頭というか腹とか肌に血に染み込んだような価値観が削れるものかどうかっていう、ものすごい疑問があるわけです。

そしたら振魂の行とかありますわね。実際そういうことをやってもっと奥のとこから本当に有用化してくれてるんかということも実感的には私は分からない。そういうことについても疑問があるわけなんです。それでいけるんかと。そういうことがあれば、僕は逆に人類が救われる道もあり得るやないかという気がするんですけどね。

それがただ格好だけのものであれば、それやったら日常の中で実際いろんな事にぶつかりますわね。自分のもってる善悪観で自分が怪我する感じになる時ありますわね。その時の方がこたえますねん。

振魂の行やとか言葉で研鑽してね、善悪はないと、神さんはもっと大きい心もってはるんやと聞かされて、それでそうかと理屈で納得するよりも、実際の生活の中でいろんな事を感じ、そこで痛みを覚えるみたいな形でズキーンときたやつは、やっぱりこたえますわ。だからその意味で、本当に自分にとって禊というか本当にミを削ぐような思いのすることというのは一体なんなのかと。

そうかいうても普段いろんな体験を人間ですからみんなしてるわけでしょ。ほんで自分の持ってる価値判断で喧嘩し、まあ人も殺すやろうし、どつきあいもしてるし、また腹も立てて、お互いにみんな世界の人間がそうして生活してるわけでしょう。それが禊なら何もせんでもいいやないかと。特別禊とせんでもええやないかと。まあ理屈から言えば人間がただ生まれてきて死ぬまで生きてりゃそれが禊なのかということにもなってしまうしね。

いや、そうではないんやと。こう何かあった時に、はっと自分で感じるその反省みたいなもんがあってこそ人間というものはある程度心に一つの変化があるのかなとも考えられる。

いろいろと価値観をつきつめてゆくと、人間が進歩するとか向上するとかいうことがあるのやらないのやら、それも分からんようになって来るんです。僕は四方八方何が何やら分からんっていう感じでね。

大抵の人は禊とか修行とか言えは、何か魂の向上を目指すとか、安定を目指すとか、浄い心になるとか言いますけど、一体人間にとって浄い心とはなんじゃろかと、向上するとは何じゃろかという疑問にぶつかるわけです。浄い心と言っとってもね、それが実は一番きたないことやってるのかも分からへん気がするんですよ。

矢追鈴月　私も禊会で、いろいろ喋った後の虚しさというものがもう本当に言われへんくらい。ほんまに一人になって涙こぼれるときあんねん。その時、この虚しさというのは何やろか、この涙は何やろかと私も考えるねん。それでもう、しょっちゅう荒ぶってるねん。

とらわれない練習

森下新蔵　私もこんだけ長いこと禊会に来てるけどもな、禊会に行って人間向上してんのか、自分で分からへんねん。法主さんやったら一番初めから知ってくれてはるさかいにね。森下は向上したとか、初めとおんなじこっちゃやないかとか分かると思うけど。こういうのは、はたから見てても らって、判断してもらわんとな、自分では向上したようも思えへんしね。禊して自分の性格やなんかでもみんな変わったんかなぁとか、得ることがあったとか、禊してからこういうええことがあったとか、自分では禊してから人間向上したとか、それも分からへんしな。

法主　それもええで、それも。自分がどれだけ変わったというような、そんなのはめったに分からへん。昨日と今日はどれたけ歳いったか自分でめったに分からへんように、これは繰り返しながら知らん間に抜けていくんやからな。

私の立場から言うとね、禊会みたいなもの、行っても行かんでもどっちでもええねん。それに行ったらどれだけ効果があるのやないのや、そんな作為を計らんと、何の抵抗もなしに禊会がある度に行くという、その素直さを持ってほしいねん。今日は禊会や言うたら、「ああそうか」と、もう

フワッといく。

自分自身としてみたら、仮にいろんな生活相談やとか身の上相談やとか、ここでパンッと座って5時間6時間、その人の泣き事、苦情、何にもこっちが意見言うことないもん。それ平気で何の屈託もなしで聴いているねん。そうしている内に、当人が自分であれやこれや解釈して考えていくねんな。皆にもね、そんな態度あったら禊会みたいなもんいらへんわな。

夫婦やとか親子やとか親類関係とか、仕事上においてとか、日常生活のどんな事でも、そっくり全部や。本当にそれを禊として心得た場合には禊になるんや。そやから禊会なんていらんねんけども、人間というのは竹の節みたいに、節というものが必要や。禊会を一つの節にして、自分の考え方とか頭の整理する時間やと思うねん。行ったからというて、進歩も向上もないと思うねんで。こんな事言うたら味もしゃしゃりもあらへんけどな。

まあキュウリはキュウリ、ナスビはナスビやけれども、やっぱり肥やし置いてみたり、虫がいたらその虫を取ったりする。それでもその本質は生まれながらのものやから変わらへん。人間の個性とか性格とかな、ポンと生まれたときから、そういうのを持ってるんやと思う。

また今頃医学の方では、血液型でも部類分けしてみて、統計で血液型によって大体どんな素質や性格やと言うてるわな。そらほぼ似てると思う、型が同じ者同士は。例えば血液型で説明すればそうやし、サルならサル、ゾウならゾウ、人間なら人間同士で共通点それぞれあると思うねんな。

それが今いう加美の掟というか、生まれつきということになるわな。それならそれでええけれども、自分についた垢をやっぱり自分でしょっちゅう掃除せにゃいかんと思うし、心に肥やしをやる事も必要やわな。

自分の本質が変わるんやなしに、はっきりと出てくるわけや。そやから例えば禊会があるというたときに、あそこへ行って自分は、人間改造やろうとか、人間的に向上しようというようなことを考えて行ったら、それは大間違いや。なることないねん。それはやっぱり訓練やねんな。

例えば、マージャンでも書道でも、名人達人みたいなもん初めからおらへんもの。とするとそこにひとつの訓練というものがあって、その人のもっている能力に磨きをかけるわけや。

今まで自分のもっている能力というものは、何かの条件において、つつみかくされているもんがあるねんな。それは自分の力でビューと抜くことできると思うねん。そやけど、ナスビがキュウリにめったに変化しやへんと、わし思うんやな。

禊でも、平たい言葉で言うたら、人間形成やとかな、人間的向上とか、やれ悟りやとか言うけれども、そんなものは本当は何もないねん。そら犬は犬、猫は猫やねん、これは。

結局自分の垢やとか何かで、かなり厚くつつまれている人間それぞれ、その人なりの本当のいいところや本当の能力というのを、引き出すだけやねん。それは向上でもなんでもなく、あたりまえのことや。

そやから禊したから人間ようなったやとか人間が変わったとか向上したとか、そんなんとはもう全然違うわけや。自分の垢だけをちょちょっと取ったらええわけや。皆自分のあまりにも堅い決めつけで、自分を縛りつけるような事をしてる。それは我が自身の苦しみやと思う。

さっきも言うたが、私は会に出ても何にも意味ないねん、自分には。禊会に出て皆をどないしたろうかとも、やれ人間的向上するように皆一生懸命やろうとか、また霊媒やっとったかて、誰がかかって来て何喋ってたかて、わしうわの空や。水くさい話しやけど。

無責任な話しやけど、神がかりや霊媒でも、喋っとったら相手はそんでええねん。疑う事も信じる事もいらへん。言うとる内容にとらわれたらあかんのや。できるだけ自分のそうしたとらわれをはずす訓練やわな。

例えば、霊媒で神さんがかかって来たとするやろ。そしたら「あっそれがほんまの神さんや、あの人のいう事、聞かんなん」と思ったら、そらもうあかんねん。もうとらわれて括られてるねん。

話しは聞いとったらいいんやけど、それを信じるというのはとらわれとるねん。そんなもん信じても疑ってもあかんねん。「ああ誰々がかかって来たって言うてはんのやな」位に聞いてたらええ。それは日常生活とかには何にも影響ないし、関係ない。むしろそんなものが気持ちにあったら、我がの生活を括りよるし、苦しむで。また悩まんなんかもわからへん。

そやから仮に神がかりが出て来て、どれだけ神さんらしいかっこうして、何を言うたって、それに引きずり込まれたりとらわれないような訓練するために、わしあれをやらしてんねん、黙って。それをまた皆が自分でとらわれんように訓練せなあかんねん。

禊会は稽古の場

法主　霊媒を通して亡くなった今井苑長が出て来

たときにでも、「今井苑長がこう言った」となったら、もうあかんねん。さっととらわれてしまったら、みな付和雷同の運命や。「あれ、今井苑長と言うてるなぁ」と、それくらいでええのや。それが苑長であってもなかってもかまへん。神がかりの自分の潜在意識が言うてるのでもかまへんやん。誰一人としてそれが今井苑長であると、実体を把握できる者はおらへんねん。分からへんねん。分からんものを信じたらあかんねん。

仮にそれが機械でもって波長でパッととらえたものやったら、これは科学的に万人が認める事やからまあええけれども、現在意識もありゃ潜在意識もありで、いろんな意識を持っている肉体を通して出て来る事やねんからな。仮に今井冨蔵ですよと言ったって、それを本当に今井冨蔵であると言う者がおかしい。それを信じず疑わず平気でできる訓練やねん、禊会は。

それは神がかりの人より、むしろ聞く側に問題があるねん。私はそれをいつも言うんやけどな。皆、弱いというのか、とらわれやすいな。

そうだからそんなものに対して何も抵抗がない事。「あんなこと言うとったなあ」って記憶にあってもええわ。記憶にあってもええけど、それに引っかかってとらわれたらあかんな。

それをまた、後で話題にしてみたりするのは、もう、もっての外やと思うねんけどな。個人の一身上の問題でも会で出したときに、あそこの家の中はああやとかどうやとかフニャフニャと後で言うたりしたら、逆にツミを塗ってるねん。取るのやなしにツミをつけてるんや、我がにも。そんな話しみたいなものを聞いて、どこにそれを心から信じるような真実性があるねん。

大体言葉というもので真実を表現をするのは、非常に難しい。言葉を使うという行為は、薄っぺらなとこをスーッと表現するだけで、本当の事は言葉では言えへん。その上っ面な言葉を聞いて、それを信じて、自分の思惑をそれに付け加えて、他の人に言うという、これくらいツミなことはないねん。ツミの上塗りや。

そういうツミを削ぐための訓練が禊会なんや。禊ということを平素生活の中で心得ているような人であれば、別に特定の時間に禊会に行く必要はないけれども、みんな寄ってそういう機会を作って、お互いに反省し合うとか、自分の気持ちを整理するとか、ものにとらわれない訓練をするとか、そういう節をつくる意味で禊会もええことや。

話し合うだけでは本質的なものにはならんけれども、最初から奥の奥までは行かれへん。誰でも窓口からポチポチ行かな。それは習字でも一緒や。筆の持ち方や、墨のすり方、それに姿勢とかから覚えんなん、というように節があるわけや。

私は毎月禊会にはもう何にも思わんとおつき合いしてる。それに対して自分自身が嫌やなとかそういう思いがあったら、これはミソがんならんけれども、何にもないねん。話しせえと言われたらするし、これから振魂ですと言うたら、みんなと同じように私もまじめに振魂やってるし、また霊媒が始まると、それに対してもまじめに扱うてるで。とらわれへん、そんなものに。

禊会は一つの稽古する場やわな。まあ言うてみたら禊会というのは、未熟者の集まりやと思う。名人級になったら、禊会に来て稽古する事いらへん。しかし、それには段階があるわけや。だからさっき香須弥が話してたけれども、自分の意思に添うても添わんでも、そんな事にはお構いなしに「ああ今日は禊会やってんねんな。年寄りばっかりやけど一度禊会に行って、参画してみよう」という、意味も何もない、フワフワッと入って来るような、その心境がええと思うんや。

自分であれやこれや考えて、こだわって結論出しとったらあかんと私は思うんや。天衣無縫というのかな禊会は自分にとらわれない心境になる一つの訓練やと思う。習字の稽古でも、週に一回とか決めるのと一緒で、それもないといかんわけやな。

（続く）

新刊書紹介『女がひとりで』

かつてイスラエルのキブツ共同体や山岸会の実顕地で生活していた経験があり紫陽花邑にも関心を寄せている、山梨県山中湖村在住の樋口範子さんが、ユダヤ人作家のイラナ・ハメルマン氏のパレスチナ占領地の人々との交流を描いた本書をヘブライ語から翻訳して出版しました。

遠く離れた日本では理解しづらい複雑な紛争に明け暮れる現地の実態を、著者のハメルマン氏はパレスチナの人々との親密なつき合いを通した体験の上に、真の和解を追及しつつ柔らかな口調で語ってくれます。関心のある方は本書を手に取って読まれることで、「和の光」への思いを深めることが出来るのではないかと思います。（かもがわ出版刊）　T

法主・言の葉

大自然の心を観る心
大自然の心に従う心
その素直な心を「みそぎ」によって
呼びおこす

「神通力如是」の真意をさぐる　第四十二回

大倭教の源流にさかのぼって

今回は霊界における日米開戦に向けてのあわただしい動きが記されています。また、金鵄祭が建速素戔嗚尊の慰霊のための祭りであるという重要な指摘もなされています。

今回の原文の冒頭数行は前回の最後の部分と重なりますが、前後のつながりが分りやすいように、あえて重複して記載させていただきました。

原　文

十二月一日　朝　於鳥見庄山。

倭姫。

大内山ノフカミドリ　松ヶ枝アソブ丹頂ノ、君ガ代ハ千代ニ八千代ニトコシエニ　代代永久ニ榮エルト　歌ヒ舞フコソ芽出度ケレ。題目。

太平楽。

四海波シズカニオサマリテ　眞①ノ正法立ツ時ハ

我ガ日本ニアザナセル　悪魔ツルギデオイ散ラシ

太平楽ト代ハナリテ　竹ノ園生ノオン榮エ

幾千代マデモ壽キ奉ル　題目。

聖壽萬歳　萬萬歳　ア、芽出度ヤナ、芽出度ヤナ

我ガ日本ハ安ラケク、外國クニニ比類ナキ

八紘一宇ノ君トシテ　我ガスメミマハ立チ玉フ

ア、芽出度ヤナ、芽出度ヤナ

倭姫挨拶退ル。

十二月二日　午後十一時、於鳥見庄山、内陣ニテ。

「今日　午後八時十五分　日米談判破裂」字にて示現。

日聖云ふ、日米の危機愈々迫りたり近く戦宣布告あらん。

十二月四日　快晴　金鵄②大祭　於鵄杜。

午後三時　於鳥見庄山御託宣。

奇稲田姫命。

「③大國主ヨ、今日ノ金鵄ノ霊ハ前ニ申セシ汝ノ父　建速素戔嗚尊ノ霊、天津皇祖ニ御恩報ジノ為汝長髓彦トシテ世ニ出セシ時天津皇祖、神倭磐余彦尊ヲ降シ玉フ。前ノ世ニ犯セシ罪ノ消滅ノタメ父君ノ霊ハ金ノ鵄トナリ、倭磐余彦尊ノ御弭ユハズニ止リ光ト変ジ汝ニ申シ聞カセシゾ。其ノ汝即チ長髓彦ハ覺リ戰ヲ止メシゾ。其霊ノ今日ハ慰メノ祭リナリ。即チ汝ノ父君　建速素戔嗚尊ノ霊ヲ慰メ報恩ノタメノ祭ナリ。眞ノ題目トナヘヨ。暇アレバ今日集ヒマセル人人ニ眞ノ正法妙法ノ原理ヲ例ヲ引キタヤスク會得ノ出来ルヤウ申シ聞カセヨ」

倭姫。

「四海波静カニオサマリテ　コノ高天原ニ八百萬餘ノ神等ガ　集ヒマシテ壽ギ玉フ日モ近シ。芽出度キ極ナリ」

「太平洋波高シ」　字にて示現。

実相。日本の戰闘艦、軍艦旗ひるがへし進む。空には無數の飛行機ありて、ともに進むなり。

「④大阪、空襲」　字にて示現。

日聖云ふ。去る二日、日米談判破裂の

実相。次で今日の実相。実相は総て事未然に防がんが為の御神示なり。眞の題目を唱へて悪魔退散を祈らねばならぬ。而し日米會戦はさけ難し。大阪空襲も一実相にして敵國の思なり。之しか退散神明に祈らねばなるまい。

註　釈

①眞ノ正法立ツ時ハ

この「時」とは、いつの事でしょう。私たち（三人の会）が納得できるその「時」は、昭和20年8月15日、太平洋戦争で日本が米国を中心とする連合国に負け、この日法主が大倭神宮において「大倭教の立教開宣」の神命を受けられた「この時」であろうと思います。

この日をさかのぼる昭和16年12月1日頃の日本の実状を記録から見てみます。

《（※「ハル・ノート」は）太平洋戦争直前の日米交渉末期、アメリカ国務長官コーデル・ハルにより日本側に手交されたアメリカ側対案。1941年（昭和16）11月20日の日本の野村吉三郎大使による打開案に対する回答として26日（日本時間27日）提示された。内容は、日本の中国および仏領インドシナからの全面撤兵、重慶を首都とする国民党政府以外のいかなる政権をも認めないことなど、きわめて非妥協的な要求をもつ対日要求であり、この文書の提出によって、日米交渉は事実上終止符を打たれた。日本側はハル・ノートをアメリカの最後通告とみなし、12月1日の御前会議では、日米交渉の挫折を理由に対米英蘭開戦を決定した。》（小学館『日本大百科全書』の中の荒井信一著『ハル・ノート』による）

《ハル・ノートの前日、南方軍総司令官寺内寿一大将はすでに征途につき東京を発っています。真珠湾の米太平洋艦隊を攻撃する任務をもつ南雲（なぐも）忠一中将の海軍機動部隊はハル・ノートがあろうがなかろうがすべては予定通り。12月1日零時までに交渉が成立しなければ、対米宣戦布告が発せられる。外交交渉には、はや残された時間はなくなっていたのです。》（平凡社ライブラリー『世界史のなかの昭和史』半藤一利著による）

このように開戦への道は軍部により着々と準備されていたのです。いずれにしても、日米間の隔たりは「和」の方向には、向かっていなかったようです。

太平洋戦争の結果、日本は敗北に至ったのですが、昭和20年8月15日の敗戦の日に法主が「立教開宣」の神命を受けた時のことを次のように記しています。これがまさに「眞ノ正法立ツ時」だったのでしょう。

《玉音を拝して重い足を引きずって大倭神宮へ参拝したんです。その時、もうわけのわからん涙がこみあげてきましてね、その気持というものは複雑すぎて口では言えませんね。しばらく神殿で黙禱していたんですが、霊界の方はなんとしたことか全く晴ればれして暁のようでした。なんだかさっぱりわけがわからないのでじっと見ていましたら大きな地球儀が現われたんです。その地球儀のどこの国にも「日の丸」のついているのには全くたまげました。神さんの方からこの相について何一つ説明してくれなかったですね。こっちで感じとれということでしょう。日本が覇道をもって世界を征服して日の丸を立てるんではなくて、神意に沿った平和社会がまず日本にできて、時の流れによってやがては世界に広がっていく、そういう相として出たんだと思うんです。これは日本がえらいということを言っているわけではありません。日本人が世界をそういうように仕向けて行くという作為的なものでもなく、あくまでも自然に日本から発生していくというふうに感じとれるんです。これは「日の丸」を日本の象徴としてみた話ですが、神意を通してみれば「日の丸」は日本の国旗というのではなく、日月一体の神ながらの理を表わしていますから、やがて世界は神ながらの神の摂理にもとづく平和社会になるという見方もできるわけです。

神の摂理にもとづく社会といえば、古代大倭にみられた祭政一致の共同体、大らかにして和やかな姿をもつ社会なんです。ですから地球儀に現われた相は、旗というよりも、そうした社会を表わす象徴としての神の心であったのだと信じています。このあと「大倭教で立て」との神示が下ったのですが、このとき、私はこうした社会をめざしての宗教活動であると悟ったわけですね。この日、宣言文を綴って神の大前に捧げたんです。》

（『ながそねの息吹』177～178頁）

②金鵄大祭（たいさい）

この記事の前年の昭和15年12月4日には大倭神宮の竣工報告祭が執り行われているが、昭和16年12月4日には「金鵄大祭」として執り行われている。これが現在の金鵄祭の始まりである。

③大國主ヨ、今日ノ金鵄ノ霊ハ前ニ申セシ汝ノ父ノ建速素戔嗚尊ノ霊……

法主の霊統の中に大国主（饒速日命）や長髄彦（長曽根彦）が実在していることは前に述べた通りであるが、ここでは長髄彦と神倭磐余彦

尊（神武天皇）の戦で金鵄が現れた時のことを、奇稲田姫命が大国主である法主に語りかけている。

この時の金鵄が建速素戔嗚尊の霊であり、金鵄大祭とは「建速素戔嗚尊の霊を慰め報恩のための祭」であると述べていることは金鵄祭のことを考える際に重要な視点である。

④「大阪、空襲」字ニテ示現。

《大空襲を受けた現実の大阪は？

このころの大阪市は昭和に入り、世界経済恐慌の影、満州事変以降の戦時体制下の統制経済によって大阪の商業は抑圧され不振となったが、反面軍需の影響で工業は著しく、人口も１９４０年（昭和15）には３２５万を数えた。

しかし、第二次世界大戦中の１９４５年３月の大空襲などで市域の27％は焼土となった。焼失倒壊家屋31万戸、死者１万余人、人口は１０５万に激減し、商工機能は壊滅状態となった。》

（『日本大百科全書・大阪市、歴史・近・現代』位野木壽一記）

現代語訳

12月１日　朝　鳥見庄山において。

倭姫「大倭鵄杜の濃い緑色の松の枝に遊んでいる丹頂鶴が、天皇の代は何代も何代も永遠に代々永久に栄えてゆくと歌い舞っているのはめでたいことです。　題目

世界が穏やかなことを祝う

世界が平穏に統治され、真の正法が立つ時は、我々日本に仇をなす悪魔を剣で追い散らし、穏やかに治まる世となって、大倭鵄杜の竹の園生の富み栄えをいついつまでもお祝い申し上げます。

題目　天皇の御寿命はいつまでも、いついつまでも続いていきます。あ、めでたいことです。めでたいことです。我々の日本は安らかで、外国に比べるもののない、全世界の君主として我々の歴代続く天皇は立たれるのです。あ、めでたいことです」

倭姫は挨拶をして退く。

12月２日、午後11時、鳥見庄山の内陣において。

「今日　午後８時15分　日米の話し合いは決裂した」字によって霊験が示された。

日聖曰く　日米の危機はいよいよ迫ってきた。近い内に宣戦の布告があるであろう。

12月４日　快晴　金鵄大祭の日　大倭神宮において。

午後３時　鳥見庄山においてご託宣あり。

奇稲田姫「大国主（法主）よ、今日の金鵄の霊は以前に話したあなたの父である建速素戔嗚尊の霊です。宇宙神（天之御中主神・日本書紀）に御恩報じのためにあなた（法主）が長髄彦として（霊界から）現世に出てきた時、宇宙神は神倭磐余彦尊を現世に遣わされたのです。前の世で犯された罪の消滅のため、あなたのお父様の霊は金の鵄となって倭磐余彦尊の弓弭に止まり、光と変化しあなたに申し聞かせました。そのあなたである即ち長髄彦はその（意向を）覚って戦を止めたのですよ。その霊の今日は慰めるための祭りなのです。つまりあなたのお父様である建速素戔嗚尊の霊を慰めその恩に報いるための祭りなのです。真の題目を唱えなさい。時間があれば今日集っておられる人々に真の正法妙法の原理を例えを引いてわかりやすく会得できるように話して聞かせなさい」

倭姫「世界がおだやかに治まってこの高天原である大倭神宮の霊界に数多の高級霊人が集われて御祝い申し上げる日も近いのです。本当にめでたいことです」「太平洋は不穏である」字にて霊験を示しあらわされた。

実相、日本の戦闘艦が軍艦旗をひるがえして進んでいく。空には数多くの飛行機があって、共に進んでいく。

「大阪空襲」字にて霊験が示しあらわされた。

日聖曰く。去る12月２日、日米談判破裂の実相があり、次いで今日の実相。実相は総て事を未然に防ぐための御神示である。真の題目を唱えて悪魔退散を祈らねばならない。しかし日米の大がかりな戦闘は避け難い。大阪の空襲も一つの実相であって敵国の思いである。これはしっかりと（悪魔）退散を神に祈らねばならない。

青山法義編集委員からの挨拶

青山法義

私事になるのですが5月末を持って54年勤めた大倭印刷を退職します。思い起こせば明日が中学校の卒業式という日に法主様が瑞光院に来るようにと言っているよとカアさんから言われ、法主さんと10分ほど話す中で印刷に関わることになりました。このあたりのことは機会があればまた書かせていただきます。

今回岸田デスクから一言書いて欲しいとの無茶振り、私が印刷を退職したら『おおやまと』の原稿をどのように大倭印刷に渡せばよいかを心配してのことのようです。でもその件は中島健会長をはじめ大倭印刷の皆さんに理解をいただき、旧教務所の一角を亡き岸野さんと同じように使わせてもらって編集のお手伝いをさせていただくことになりました。これからもできる範囲で『おおやまと』の編集のお手伝いをさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

あじさい日誌

4月8日　午後2時から大倭大本宮拝殿において、須佐緒祭が開かれました。この日は昭和38年4月8日の法話をお聞きしました。

4月12日　午後2時から大倭拝殿において大倭会主催の禊会が開かれました。この日のテーマは「私の出会い」で、参加者各自が人生の中での大切な出会いについて語りました。

4月13日　昨晩から大本宮拝殿で、禊の行法の最中に霊動が起こって朝を迎えたらしい4人組がいました。

4月15日　午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

4月19日　午後2時から大倭大本宮拝殿において鈴月かあさんの25年目の帰幽祭が行われました。この日は1960年代前半の頃の八ミリフィルムに残る紫陽花邑の記録をビデオ編集して皆で楽しみました。

教務本庁前に咲いた藤の花

4月23日　午後2時から大倭大本宮の月次祭が行われました。この日は昭和38年4月23日の法話をお聞きしました。

午後4時から大倭会館において大倭会役員会が開かれました。

4月24日　午後5時から教務本庁で本紙『おおやまと』の編集会議が開かれました。

5月3日　午前8時から大倭墓地の掃除が行われました。引き続き「土師部の杜」の掃除も行われました。

5月6日　午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

午後6時半から大倭会館で邑倭の会が開かれました。

大倭安宿苑では

（菅原園）

4月14日　移動パン屋さんが来られ、まだかまだかと朝から楽しみにしている方がいました。朝食に出ないようなパンが豊富で悩む方も多くいました。

5月4日　平城宮跡のイベントにドライブサークルとしてご希望の6名の方と行きました。イベントは強風で残念ながら中止になっていましたが、集合写真を撮ったり、興味のあるものを見て購入したり、有意義な時間を過ごしました。

（須加宮寮）

4月14日　書道クラブを行いました。先生にお手本を出してもらうと、順番にお手本を選んで席につき、筆をとって熱心に書いていました。

4月19日　奈良県障害者スポーツ大会（卓球）に3名が参加され金メダル・銀メダルをもらい帰苑しました。

4月23日　単独防災避難訓練を行いました。放送を聞いてからヘルメットを被り階段を下りてピロティに避難しました。2階・3階と分かれて並ぶ訓練も行いました。

（長曽根寮）

4月16日（デイ）　デイサービスリハビリコーナー裏の八重桜を眺めながら厨房手作りの松花堂弁当を食べました。

4月28日・5月5日（特養）　鯉のぼりの飾りつけを作成して、端午の節句に関わる音楽をかけ、フロアに飾り付けを行いました。

（茂毛路園）

4月7日　午後より茂毛路園周辺に咲いている桜を観覧しながら和菓子のおやつを食べました。最後に記念写真を撮り、お花見雰囲気を味わいました。

5月5日　午後より1階あじさいホールにて、こどもの日という事で折り紙で鯉のぼりと兜を折りました。最後に記念写真を撮りました。居室へ戻る際、「これ持って帰っていいですか？お部屋に飾ろかな」といわれる方もいました。

第355回大倭会文化行事

～身延山に七面大天女を訪ねる～

日　程　2026年10月25日（日）・26日（月）

行き先　身延山、石和（いさわ）温泉、マルス山梨ワイナリー、河口湖、焼津さかなセンター

宿　泊　石和温泉　銘石の宿かげつ（山梨県笛吹市）

定　員　27名

費　用　4万7千円

申込・問合せ　溝口富士男 080-3101-1639

（関東方面からの途中参加を希望の方は溝口まで問合せ願います。）

※矢追日聖著『やわらぎの黙示』の「一大事の因縁ー日蓮をめぐって」の特に「身延山での奇蹟」の章を参考にしてください。

あんない

＊月次祭（大倭神宮）

6月6日(土)　午後2時より大倭神宮にて。

＊大倭会主催禊会

6月14日(日)　午後2時より大倭拝殿にて。6月は12月とともに大禊の月です。各々の場所で心掛けましょう。

＊月次祭（大倭神宮）

6月15日(月)　午後2時より大倭神宮にて。

＊月次祭（大倭大本宮）

6月23日(火)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

ご帰幽のお知らせ

群馬県前橋市在中の**中村孝明**さんが、去る4月6日に87歳で帰幽されました。中村さんは群馬県安中市の「新皇教宮」を祀る中村家の長男として生まれ、平成26年に大倭会文化行事で同教宮を訪れた際に他の関係者の方々と一緒に暖かく迎えてくださいました。

編集後記

▼連載中の「座談会・法主を囲んで」は読者の三宅淳之さんが拝殿の「大倭アーカイブ（？）」で聞いて感銘を受け、「ぜひ再録を」と語られたので、三宅さんにも助けていただきながら再編集作業をしています。　T